

序

私は、アメリカのピッツバーグ大学で12年間基礎研究に携わりました。日本からを含め、多くの留学生を受け入れ、一緒に研究をさせていただくなかで、優れた臨床医は必ず優れた科学者であることがわかりました。医学はScience and Artであり、日常の診療から出た疑問を解決するために、論文を読み、研究の計画を立てて遂行するのは、医学が発展する最も大切なステップです。現在行われている医療での診療や処置は、先人たちの努力により学問的に裏づけされたもので、医学研究なしに発展はありません。

人口が減少しているにもかかわらず、救急搬送数はどんどん増加しています。反面、救急医療に従事する医師は減少の一途をたどり、地方では救急の崩壊が医療崩壊につながっています。救急医学には興味はあるし、勉強したいけれど、専門にやろうとは思わない、そういう研修医の先生は多くおられます。しかし、救急外来を訪れる患者さんは多彩な症状を訴え、劇的な経過をたどることが多く、学問として大変興味深い分野でもあります。われわれ救急医は、現場主義で臨床のエビデンスを重視するあまり、その裏側にあるサイエンスをないがしろにした歴史があり、その反省も踏まえて本コラムを雑誌「レジデントノート」の連載で執筆してきました。

研修医の先生は日常の業務に追われ、なかなか学術まで手が回らないのが現実だと思いますが、専門医の取得に論文業績や学会発表が必要なのは、学術が医学に必要であることの証明です。そして、日常の診療にはいくらでも研究の対象が転がっているのです。本書を読んでいただいた研修医の先生が、将来、素晴らしいAcademic Physicianとして活躍してくださることを夢見ています。

最後になりましたが、連載の書籍化にあたり、レジデントノート編集部の方に多大なるご協力・ご助言を得ましたこと、心より感謝申し上げます。また、このようなコラムを書かせていただけるのも、岡山大学高度救命救急センターのスタッフの皆さんが支えてくださるおかげであり、深謝するとともに今後も更なる努力を続けていく所存です。